

市民ニーズの把握と分析

アンケート調査とワークショップの実施を通じて

新図書館の整備にあたり、市民の利用実態やニーズ、新施設への期待を把握するため、市民アンケート調査及び住民参加ワークショップを実施しました。

アンケート調査は、令和 8 年 7 月 27 日から 8 月 16 日にかけて、市内在住者を対象とした無作為抽出 2,000 件への郵送依頼のほか、広報かたの 8 月号及びホームページ・SNS 等での QR による回答受付、各図書館での紙媒体の設置、令和 8 年 7 月 14 日から 8 月 16 日にかけて市内小学校 4・5・6 年生及び中学校・高等学校への依頼により実施し、合計 1,391 件（市内無作為抽出 404 件、アンケート QR637 件、小学生 159 件、中学生・高校生 55 件、紙ベース 136 件）の回答を得ました。このうち無作為抽出分は 404 件（回収率 20%超）であり、統計的な信頼性を確保する上で一定の要件を満たしているといえます。

ワークショップは、令和 8 年 8 月 22 日に青年の家において開催し、周知にあたっては、市のホームページへの掲載のほか、市内公共施設への案内チラシの掲示を行いました。また、子育て家庭でも参加しやすいよう託児室を設け、当日は 25 名の参加がありました。ワークショップでは、「人」カードと「時間」カードを組み合わせ、「誰が」「いつ」利用するのかという偶然的組み合わせから想像を広げる手法により、新図書館で過ごす「素敵な情景」45 件と、その実現に必要な空間・運営の工夫を得ました。

1. アンケートを通じた利用実態からみた課題

①既存利用者が求める基本機能の充実

現在の主な利用施設は「青年の家図書室」が 52.9%と過半数を占め、新施設の土台となる利用者層がすでに形成されています。この層が現状に対して抱く不満は、座席の不足、蔵書冊数、読みたい本が見つからないことなど、いずれも図書館の基本的な機能に集中しています。また来館は平日を中心とし、1 回あたり 1 時間程度のこまめな利用が中心です。

②非利用の要因

図書館を利用していない層は、施設・設備そのものへの不満が相対的に少なく、「特に不便は感じていない」という回答が目立ちます。中・高校生においても、利用しない理由は「そもそも図書館に用事がない」が 57.1%と突出しています。すなわち、非利用の要因は施設・設備に対する不満ではなく、図書館を利用する機会や動機の不足にあります。

利用する場合には 2～3 時間程度のまとまった時間を確保したいと考える傾向があり、座席への電源設置や自動貸出機器等の ICT 環境、電子書籍や混雑状況の事前確認といったサービスについて、既存利用者以上に高い水準を求めています。

③日常的な居場所を持たない層の存在

自宅や職場・学校以外で過ごす場所については、20 代から 40 代がカフェ等の居場所を活用

しているのに対し、60代及び70代以上では「特にそうした場所はない」との回答が4割を超えています。中学生・高校生においても、交野市の印象として「同世代が遊べる・集まれる場所が少ない」が30.9%に上っており、世代を問わず居場所の不足が課題として表れています。

④世代ごとに異なる来館のきっかけ

日常生活の中で地域にあればよいと感じる場所は、10代から20代が「集中して作業できる場所」、30代から40代が「子連れでも気兼ねなく過ごせる場所」、50代から70代以上が「ふらっと立ち寄れる場所」と、世代によって異なります。また小学生では「ね転がったり、クッションに座ってリラックスできる場所」が77.4%、中学生・高校生では「飲食ができるスペース」が63.6%と最も多く、くつろぎと軽飲食が来館のきっかけとなっています。

⑤既存拠点と補い合う関係

青年の家図書室の利用者は、その多くが新施設の利用者へ移行すると見込まれます。一方、倉治図書館及び星田会館図書室の利用者は、それぞれ自館への継続利用意向が最も強く、第1児童センターこども図書室の利用者は「複数施設の併用」が最も多くなっています。新図書館は既存拠点を代替するものではなく、互いに機能を補い合う関係が求められています。

2. ワークショップから整理した利用者ニーズ

参加者が描いた45件の情景からは、次の傾向が読み取れます。

①誰かがいる場所で思い思いに過ごす

「誰かと一緒に何かをする」情景よりも、「誰かがいる場所で、思い思いの時間を過ごす」情景が多く挙げられています。会話や交流を強制されることはないが孤立もしていない、ゆるやかな距離感が、どの人物像においても共通して求められています。

②子ども・若者の居場所への期待

45件中最多の11票を集めた情景は「小中学生の集合場所」です。参加者は中学生・高校生本人ではない幅広い世代の市民であり、子ども・若者の居場所づくりが、当事者だけでなく多くの市民から期待されています。

③誰もが当たり前で過ごせる日常

肩書きや立場にとらわれず誰もが気軽に立ち寄れる情景や、手話・点字を使う人、車椅子やベビーカーを利用する人、外国にルーツを持つ人が、当たり前の日常として過ごす情景が多く挙がりました。中でもベビーカー利用者の情景には45件中2番目に多い7票が集まっており、バリアフリー化への関心の高さがうかがえます。

④くつろぎと活動の両立

くつろぎ・滞在を求める情景と、活動・にぎわいを求める情景とが、いずれも多く挙げられています。求められているのはどちらか一方ではなく、その日の目的や気分に応じて過ごし方を選べることです。

3. 市民意見の傾向

アンケートとワークショップの結果を重ね合わせると、市民が求めているのは機能の数の多さではなく、本や情報、人、施設との「距離」のとり方であることが読み取れます。

①人と本・情報の距離

アンケートにおいては、既存利用層が感じる不便が蔵書・座席・選書に集中し、小学生が「ワクワクする図書館」として挙げた回答も「読みたい本がいっぱいある図書館」が61.6%と最も多く、蔵書の充実は世代を問わず求められています。一方、ワークショップから挙げられた情景の多くは滞在や交流に関するものですが、これらは基本機能が確保されて初めて成り立つものです。基本機能の充実を土台とし、その上に滞在や交流の機能を重ねていくことが求められます。

②人と人の距離

ワークショップからは、交流を強制されない、ゆるやかな距離感が共通して求められていることが読み取れます。アンケートにおいても、中学生・高校生が新図書館に最も期待する姿は「学校でも家でもない、友達と気軽に集まってゆるく過ごせるサードプレイス（居場所）」が63.6%で最も多く、「公園やカフェのような癒しの空間」（60.0%）が続いており、学習のための場所としてよりも居場所としての機能が求められています。ワークショップで「小中学生の集合場所」が最多票を集めたことと合わせると、子ども・若者の居場所づくりは、当事者のニーズであると同時に、幅広い世代の市民に期待されている要件であるといえます。

③人と施設の距離

ワークショップからは、立場や身体状況にかかわらず誰もが当たり前で過ごせる情景が多く挙げられました。アンケートにおいても、日常的な居場所を持たない高齢層が4割を超え、中学生・高校生も集まれる場所の少なさを挙げています。バリアフリー化や多様な利用者への対応は、特別な配慮としてではなく、誰もが日常的に利用できる環境として、主たる空間と動線そのものに組み込むことが求められます。

4. 新図書館整備に求められる要件

新図書館の整備にあたっては、次の事項を計画上の要件として位置づけます。

- ・ 蔵書、座席、選書等の基本機能の充実
- ・ 目的がなくても滞在できる場の整備
- ・ 誰もが日常的に利用できる環境の整備
- ・ 静けさやにぎわい、個の時間、交流など、利用者が過ごし方に応じて選べる空間構成

新図書館に求められているのは、機能を数多く備えることではなく、基本となる機能を確実に満たしたうえで、本と人、人と人、人と施設との間に「ちょうどよい距離」を築くことです。近づきやすく敷居が低い一方で、関わりを強制されることなく自分の時間を保てる場を整備します。

(仮称) 青年の家図書館市民アンケート実施報告書

01. アンケート調査の概要

(仮称) 青年の家図書館の整備計画の策定にあたり、施設に対する市民ニーズや利用意向を把握することを目的として、アンケート調査を実施した。

調査方法は、交野市内在住の方を対象に無作為抽出した 2,000 件へアンケート依頼はがきを送付したほか、広報交野 8 月号にアンケート用 QR コードを掲載（ホームページ・SNS・市内公共施設ポスターQR からの回答を含む）、各図書館に紙ベースのアンケートを設置するとともに、市内小学校 4・5・6 年生および中学校・高等学校へのアンケート依頼を行った。

調査期間は、市内無作為抽出・広報かたの 8 月号・紙ベースについては令和 8 年 7 月 27 日から 8 月 16 日まで、小学生・中学生・高校生については 7 月 14 日から 8 月 16 日までとした。

回収件数は、市内無作為抽出 404 件、広報かたの 8 月号 QR コード 637 件、小学生 159 件、中学生・高校生 55 件、紙ベース 136 件の合計 1,391 件であった。なお、無作為抽出における回収件数は 400 件、回収率 20%を超えており、統計的な信頼性を確保する上で一定の要件を満たしていると言える。

02. アンケート結果から読み取れる傾向とまとめ

(1) 現状の利用者（コア層）の傾向

回答者は 30～60 代の労働世代を中心に女性が多く、半数以上が月 1 回以上利用する定期利用層である。現在の主な利用館は「青年の家図書室」が過半数を占め、既に新施設の土台となる利用者層が形成されている。既存利用者が現状の図書館に対して抱く不満は、座席不足・蔵書冊数・読みたい本がないなど、いずれも図書館の基本的な機能に集中しており、来館は平日中心・1 時間程度のこまめな利用が中心である。倉治図書館・星田会館図書室の利用者は自館への継続利用意向が強く、新施設は既存拠点を代替するのではなく、機能を補い合う関係になると見込まれる。また第 1 児童センターこども図書室の利用者は『複数施設の併用』が最多であり、子育て世帯は単一の拠点に依存しない柔軟な利用スタイルを取ると見込まれる。

(2) これまで利用のなかった層の傾向

非利用層は、既存の図書館設備そのものへの不満は相対的に少なく、「特に不便は感じていない」との回答が目立つ。これは施設への不満というより、そもそも図書館を利用する機会やきっかけを持っていないことを示唆している。一方で、60 代・70 代以上は日常的な"居場所"を持たない割合が高く、既存の居場所を持たない高齢層にとって図書館は潜在的な受け皿となり得る。また非利用層は、いざ利用する際には 2～3 時間程度のまとまった滞在を想定し、電子書籍サービスや混雑状況の事前確認といった非来館型のデジタルサービス、さらには電源設備や自動貸出機器などの ICT 環境についても、既存利用者以上に高い水準を求める傾向がある。こ

れは、10~20 台の若年層が求める「Wi-Fi や電源があり、集中して仕事や勉強ができる場所」のニーズに答えることにもつながる。

(3) 新規利用者を取り込むための方向性

【整備の方向性】

- ① 図書館の基本機能の充実：既存利用者が求める座席・蔵書・選書の強化は新施設整備の土台となる。
- ② 高齢層の「居場所」としての機能強化：日常的な居場所を持たない 60 代以上を主な対象に、気軽に長時間過ごせる空間を用意する。
- ③ 世代別ニーズへの対応：子育て世代（30~40 代）には子連れで過ごせる場所を、若年層（10~20 代）には集中して作業できる環境を、それぞれ個別に用意する。
- ④ 非利用層向けの導線設計：来館のハードルを下げる電子書籍・混雑状況確認等のオンライン機能に加え、まとまった時間でも快適に過ごせる設備（電源・セルフ貸出機等）を整えることで、これまで利用のなかった層の来館のきっかけをつくる。

03. 小学生・中高生アンケートから読み取れる傾向とまとめ

(1) 世代による利用実態の変化

小学生は家族同伴での来館が中心であるのに対し、中高生になると「友だち」「ひとり」での来館割合が相対的に高まり、来館の目的も本の貸出・返却という基本利用が中心になる。ただし来館頻度は年齢が上がるほど低下する傾向があり、中高生では「ほとんど行かない」が 27.3%と最多である。忙しさに加え、「そもそも図書館に用事がない」という動機の欠如が非利用の最大の理由になっている点は、一般向けアンケートで見られた非利用層の傾向（施設への不満よりも利用機会の乏しさが課題）と共通している。

(2) 既存利用者とそれ以外の層で異なるニーズ

一般向けアンケートで見られた「コア層は基本機能、非利用層は異なる要素を求める」という構図は、小学生にも当てはまる。小学生の利用有層は「ひとりでゆっくり本が読める場所」や「読みたい本がいっぱいある図書館」、「実けんや工作をするワークショップ」を求める割合が高いのに対し、利用無層は「自分のゲームを持ってきて音を出して遊べる場所」や「『公園』みたいのにのびのび遊べる図書館」を求める割合が相対的に高い。既存の小学生利用者には「本」と「体験学習」が響く一方、利用頻度の低い層には「遊び」「ゲーム」といった、より自由度の高い要素が来館のきっかけになり得る。

(3) 子ども・若者世代が新施設に求めるもの

小学生・中高生に共通するのは、「勉強のための静かな場所」以上に「くつろげる・居心地の

良い場所」への強い関心である。小学生は「ひみつきち」のような非日常感やごろ寝・クッション席、軽い飲食を求め、中高生は「サードプレイス（居場所）」やカフェ的な癒やしの空間を最も求めている。中高生アンケートでは「同世代が遊べる・集まれる場所が少ない」という交野市への印象も3割を超えており、学校でも家でもない第三の居場所としての図書館への期待がうかがえる。

(4) 新施設整備への示唆

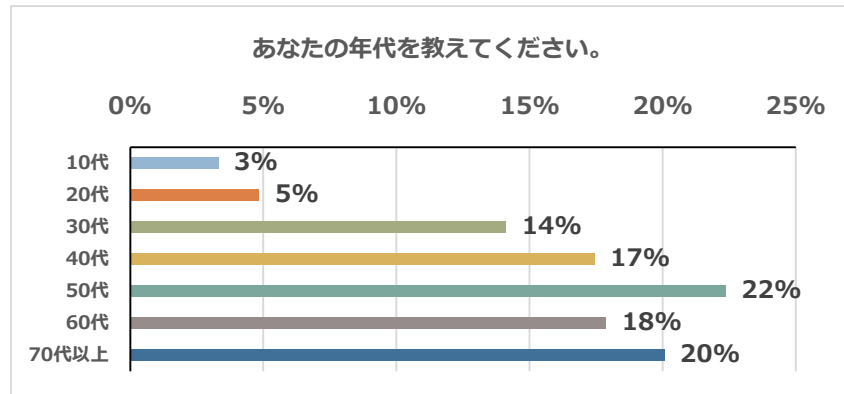
【整備の方向性】

- ① くつろぎ空間の整備：ごろ寝・クッション席、ソファなど、勉強目的に限らない「くつろげる場所」を小学生・中高生共通のニーズとして重視する。
- ② 軽飲食機能：小学生・中高生の双方で支持が高く、来館のハードルを下げる要素として有効。
- ③ 体験・交流型プログラム：小学生には実験・工作やゲームなどの体験型企画、中高生には自習スペースと交流スペースを併設するなど、世代に応じた企画設計が求められる。
- ④ 中高生の「サードプレイス」化：中高生は図書館を勉強の場としてよりも、学校でも家でもない居場所として位置づけたいという意向が強く、同世代が気兼ねなく過ごせる専用スペースの検討が有効と考えられる。
- ⑤ 利用のきっかけづくり：中高生の非利用理由は「用事がない」ことが中心であり、部活・塾で忙しい生活の中でも立ち寄りたくなるような機能・企画による動機づけが必要である。

04. 一般向けアンケート

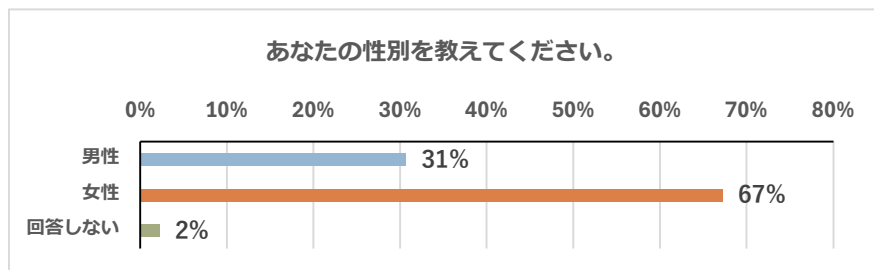
単純集計

Q01. あなたの年代を教えてください。【単一選択】



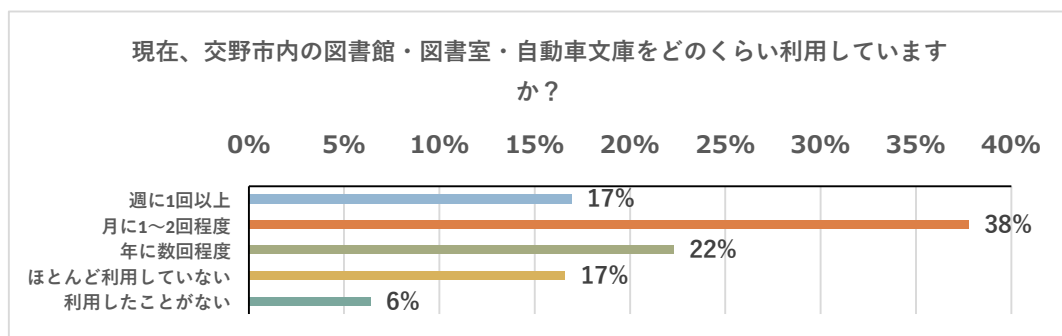
回答者は40代以上が77.6%を占め、50代（22.3%）と70代以上（20.1%）が特に多い。10～20代の若年層は合計8.1%にとどまる。

Q02. あなたの性別を教えてください。【単一選択】



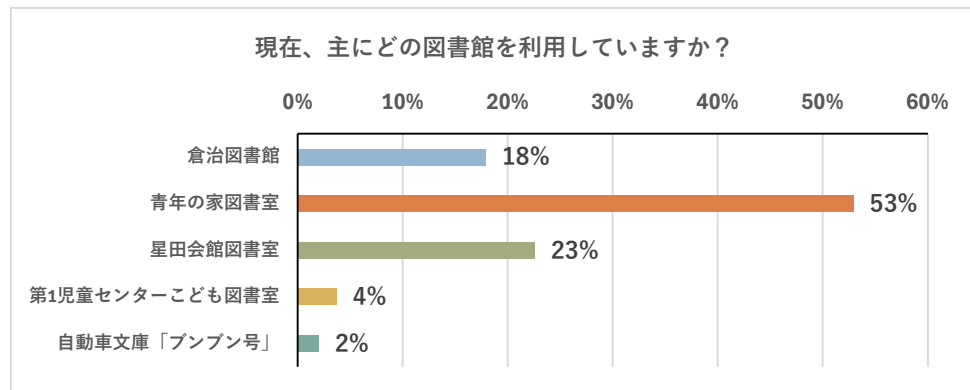
女性が67.1%と過半数を占め、男性（30.7%）の倍以上。

Q03. 現在、交野市内の図書館・図書室・自動車文庫をどのくらい利用していますか？【単一選択】



「月に1～2回程度」が37.8%で最多。「週に1回以上」と合わせた定期利用層は54.7%に達する一方、「利用したことがない」も6.4%存在する。

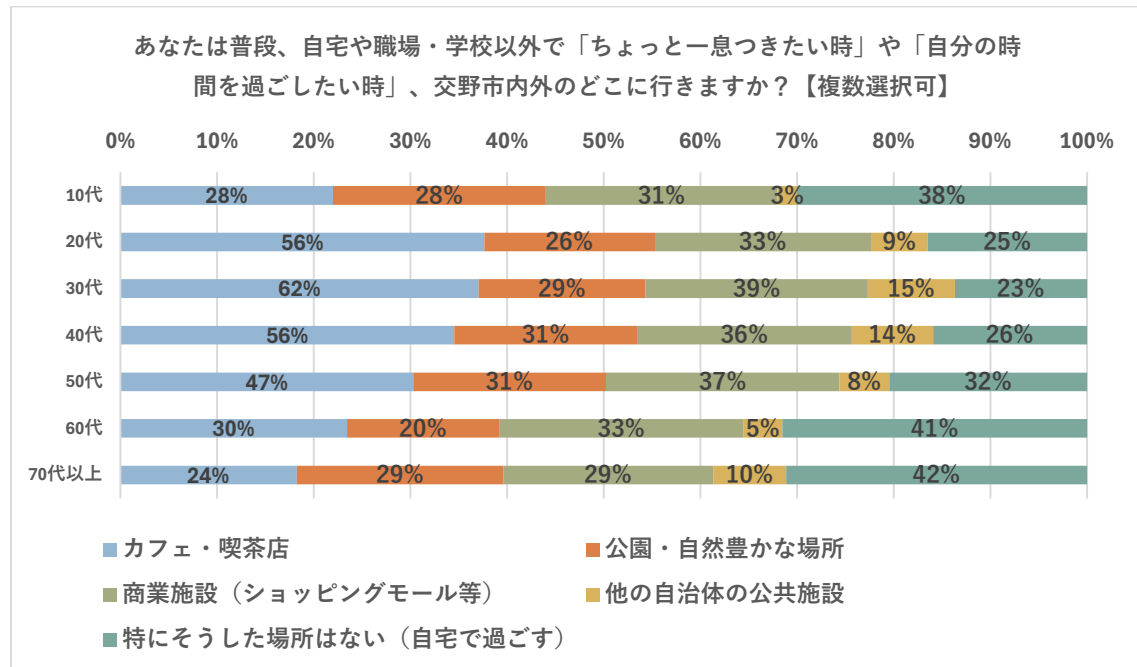
Q04. 現在、主にどの図書館を利用していますか。【単一選択】



「青年の家図書室」が52.9%と過半数を占め、新施設の前身にあたる施設がすでに最大の利用館である。新施設整備の土台となる利用者層がすでに存在している。

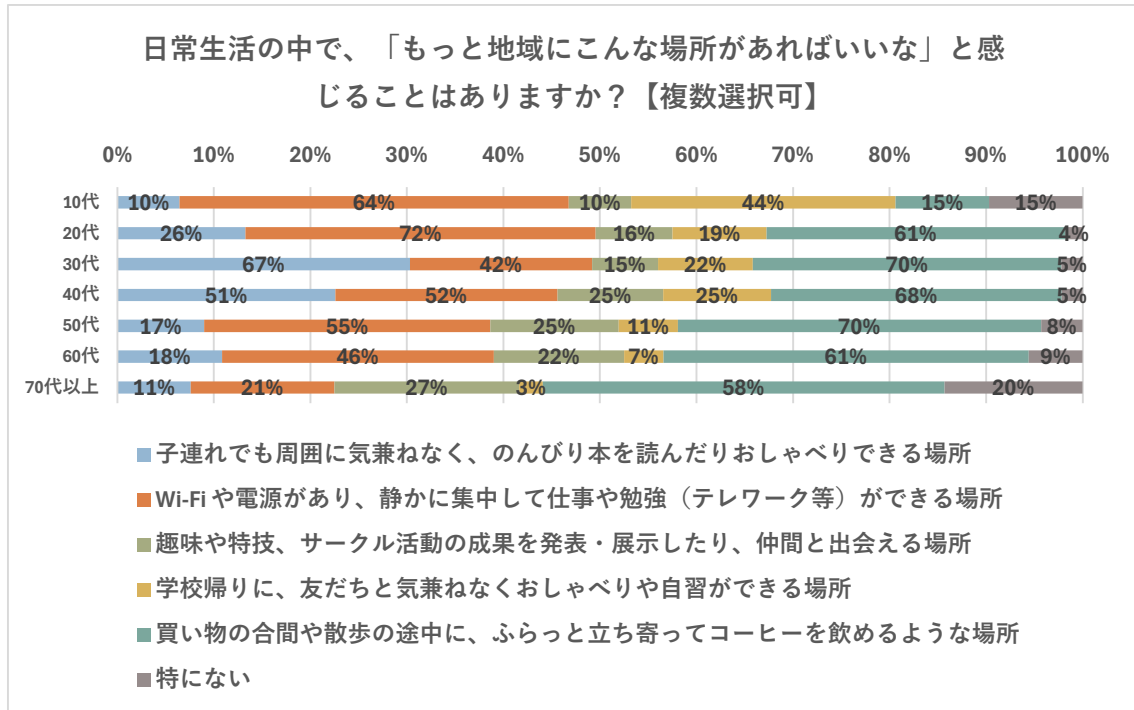
クロス集計（年代別）

Q07. あなたは普段、自宅や職場・学校以外で「ちょっと一息つきたい時」や「自分の時間を過ごしたい時」、交野市内外のどこに行きますか？【複数選択可】



20～40代の現役世代はカフェなど図書館以外の"居場所"をすでに活用しているのに対し、60代・70代以上は「特にそうした場所はない」との回答が4割を超え、既存の居場所を持たない高齢層こそ図書館が新たな受け皿となり得る。

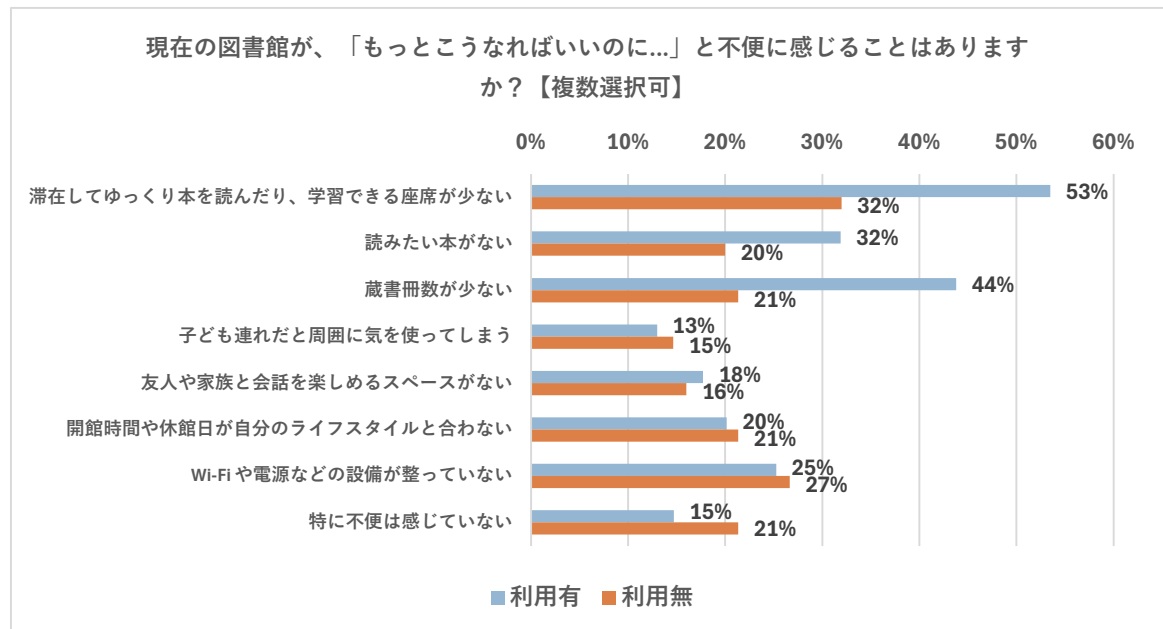
Q08. 日常生活の中で、「もっと地域にこんな場所があればいいな」と感じることはありますか？【複数選択可】



子育て世代（30～40代）は「子連れでも気兼ねなく過ごせる場所」を、若年層（10～20代）は「集中して作業できる場所」を、50～70代以上は、ふらっと立ち寄れる場所を求めている、世代ごとに異なる潜在ニーズが明確に分かれる。

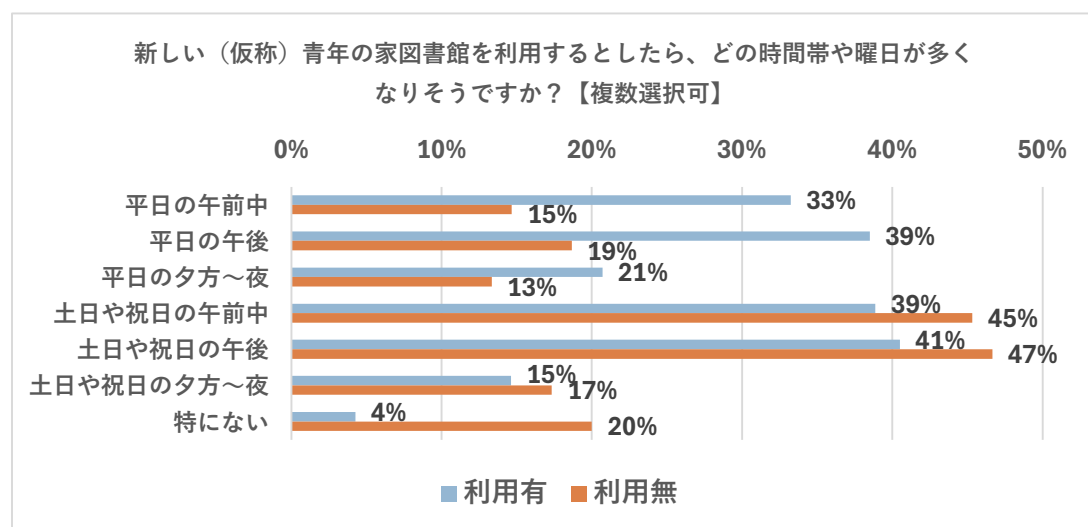
クロス集計（利用有無）

Q05. 現在の図書館が、「もっとこうなればいいのに…」と不便に感じることはありますか？
【複数選択可】



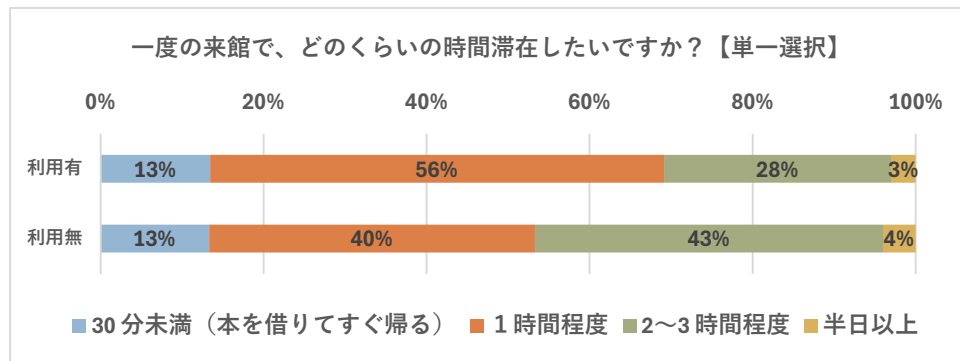
図書館を利用している層は座席不足・蔵書冊数・読みたい本の不足といった具体的な不満を強く感じているのに対し、利用していない層は「特に不便は感じていない」との回答が相対的に多い。非利用の理由は施設面の不満そのものよりも、そもそも利用する機会やきっかけの乏しさにあると考えられる。

Q10. 新しい（仮称）青年の家図書館を利用するとしたら、どの時間帯や曜日が多くなりそうですか？【複数選択可】



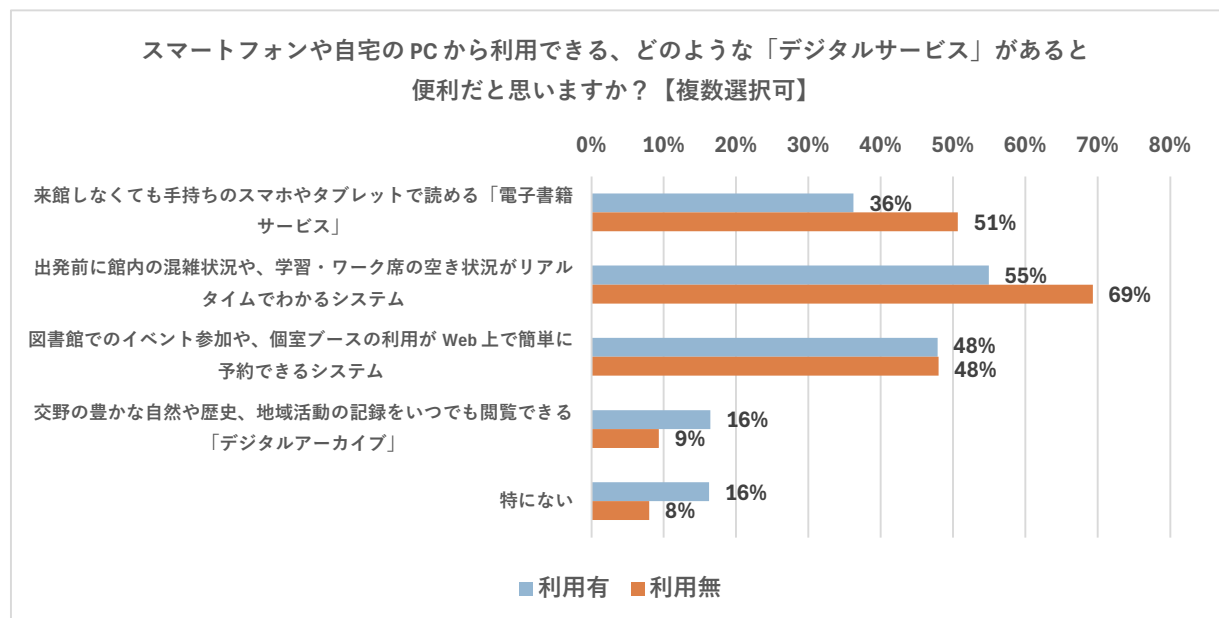
利用有層は平日の来館意向が明確であるのに対し、非利用層は「特にない」との回答が2割に達し、時間帯を問わず来館意欲そのものが乏しい。相対的には非利用層も土日への意向はやや高く、休日に来館のきっかけをつくる企画が有効と考えられる。

Q11. 一度の来館で、どのくらいの時間滞在したいですか？【単一選択】



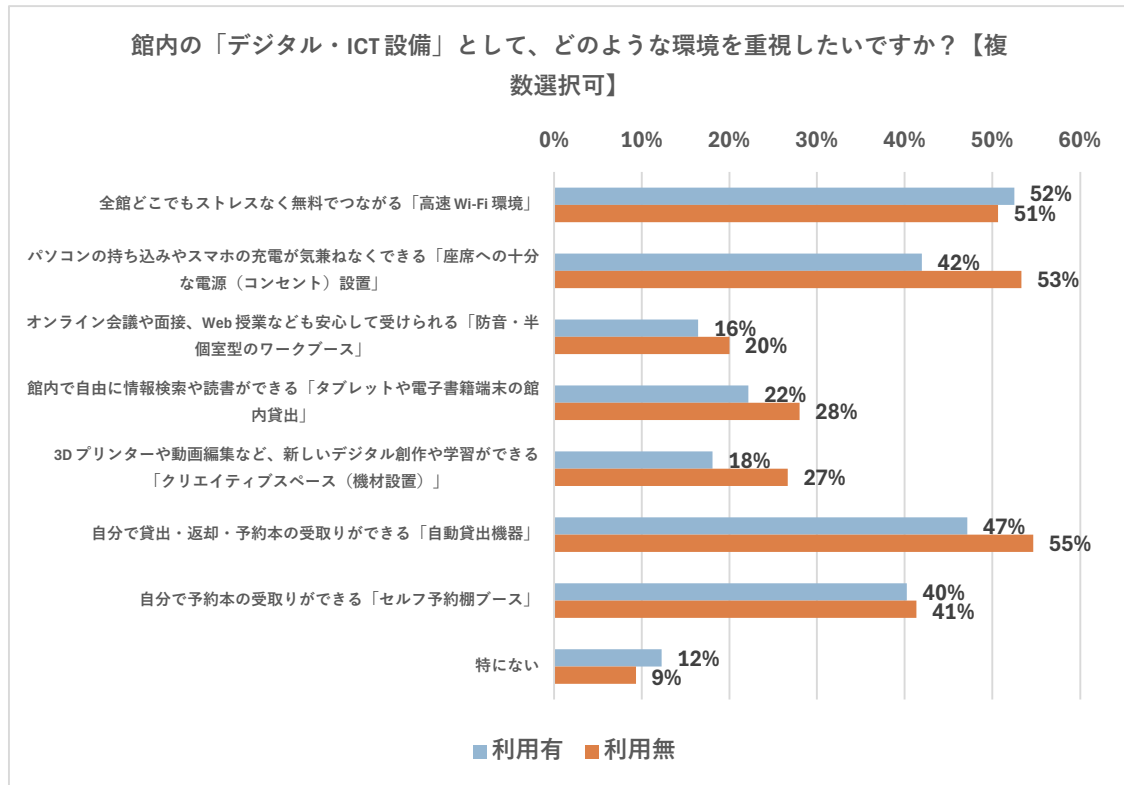
利用有層は「1時間程度」のこまめな利用を想定するのに対し、非利用層はいざ利用するなら「2〜3時間程度」とまとまった時間を確保したいと考えており、日常的な短時間利用ではなく特別な機会としての利用を想定している可能性がある。

Q12. スマートフォンや自宅のPCから利用できる、どのような「デジタルサービス」があると便利だと思いますか？【複数選択可】



非利用層は「電子書籍」や「混雑状況の事前確認」など、来館前後や非来館でも完結するサービスへの要望が利用層より明確に高い。来館のハードルを下げるオンライン機能の充実が、非利用層を取り込む糸口になり得る。

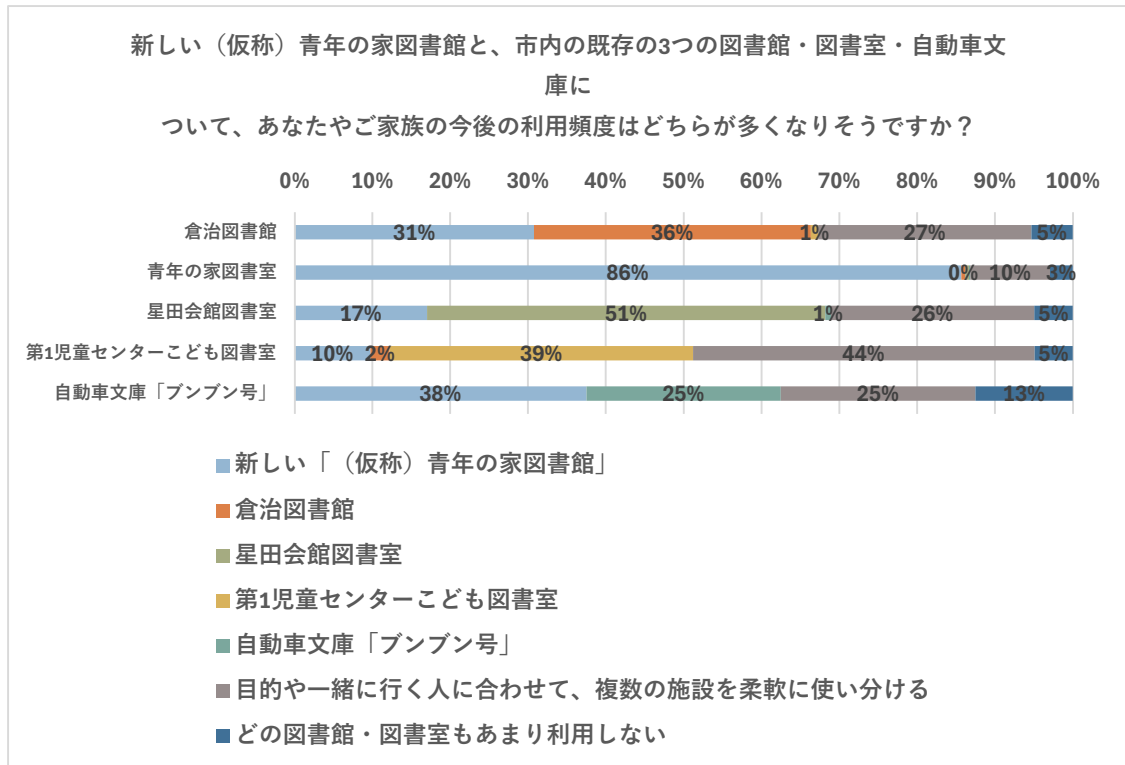
Q13. 館内の「デジタル・ICT 設備」として、どのような環境を重視したいですか？【複数選択可】



座席への電源設置や自動貸出機器など、非利用層はむしろ利用層より高い設備水準を求める傾向がある。現状の図書館設備が非利用層にとって「物足りない」と映っていることが、非利用の一因になっている可能性がある。

クロス集計（施設別）

Q17. 新しい（仮称）青年の家図書館と、市内の既存の3つの図書館・図書室・自動車文庫について、あなたやご家族の今後の利用頻度はどちらが多くなりそうですか？【単一選択】

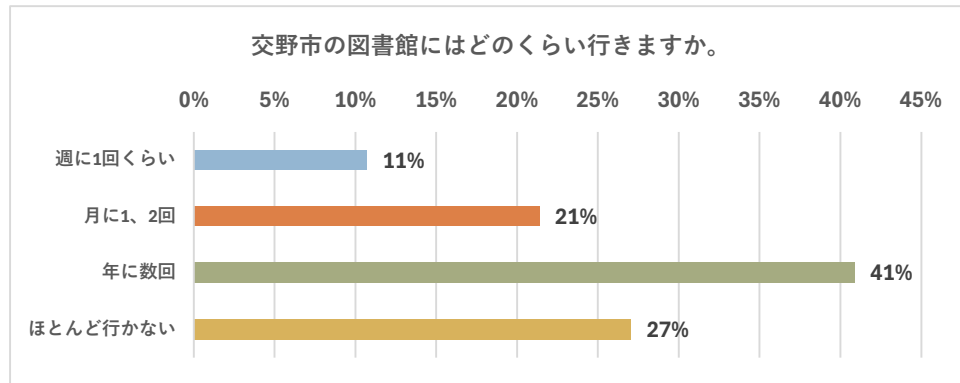


青年の家図書室の利用者はほぼそのまま新施設の利用者へ移行すると見込まれる一方、倉治図書館・星田会館図書室の利用者はそれぞれ自館への継続利用意向が最も強く、新施設は既存拠点を代替するのではなく併存・すみ分ける形になると考えられる。特にこども図書室の利用者は「複数施設の併用」が最多であり、子育て世帯は単一の拠点到依存しない柔軟な利用スタイルを取ると見込まれる。

小学生向けアンケート

単純集計

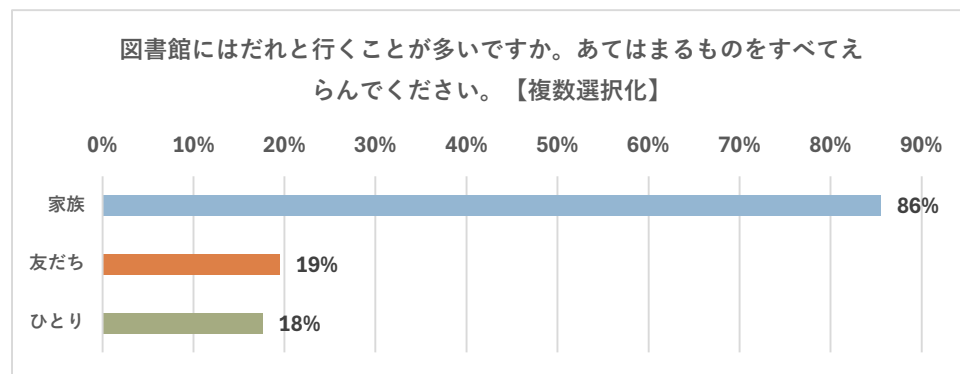
Q04. 交野市の図書館にはどのくらい行きますか。



「年に数回」が40.9%で最多。「ほとんど行かない」も27.0%あり、日常的な利用者は週1回・月1～2回を合わせて32.1%にとどまる。

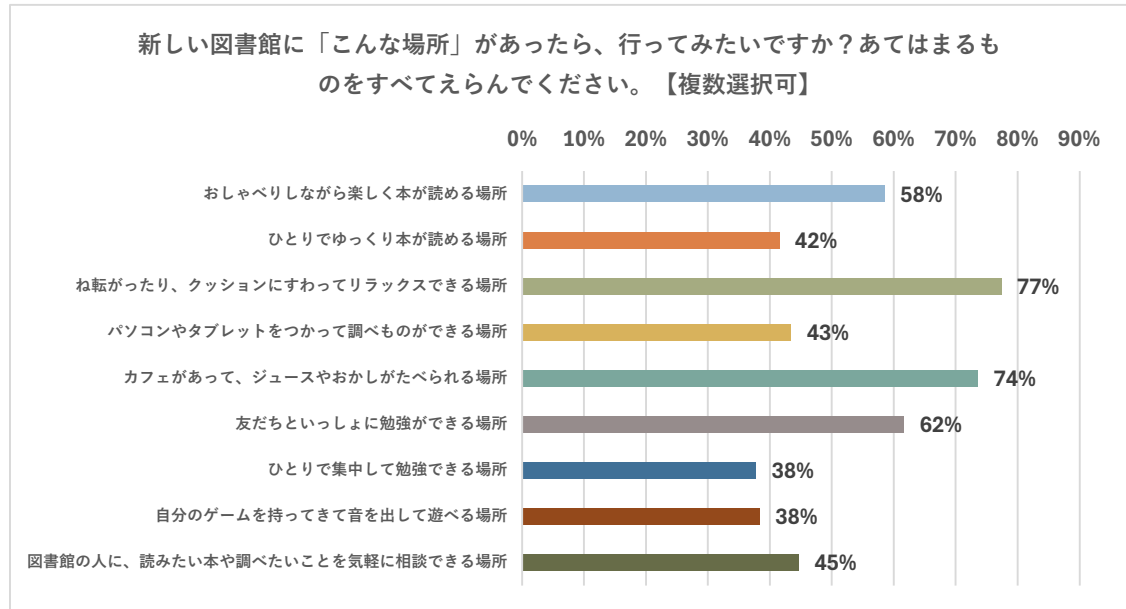
Q05. 図書館にはだれと行くことが多いですか。あてはまるものをすべてえらんでください。

【複数選択化】



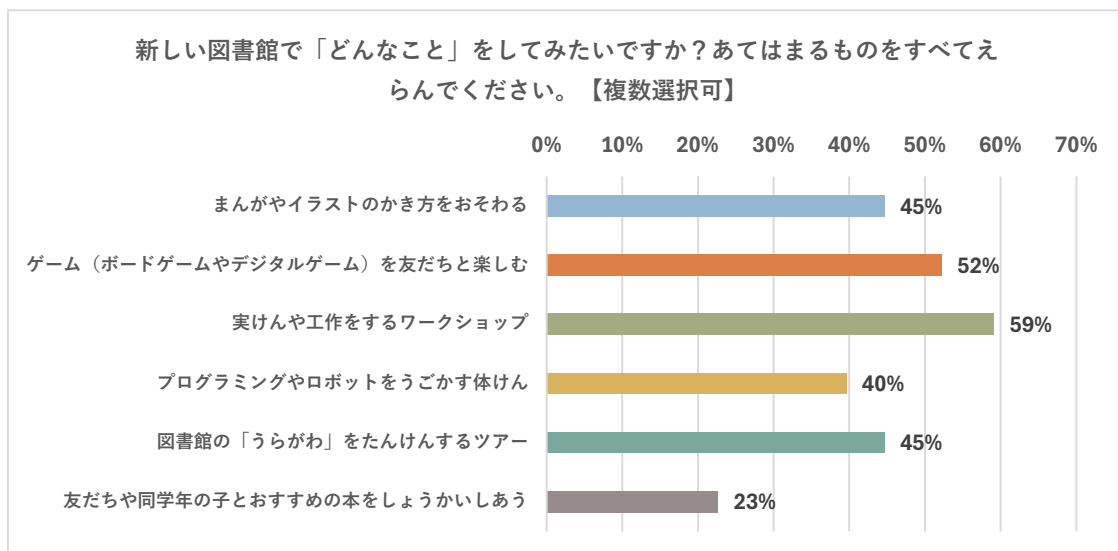
「家族」が85.5%と圧倒的に多く、小学生の来館は保護者同伴が基本であることがわかる。「友だち」(19.5%)「ひとり」(17.6%)は少数派。

Q07. 新しい図書館に「こんな場所」があったら、行ってみたいですか？あてはまるものをすべてえらんでください。【複数選択可】



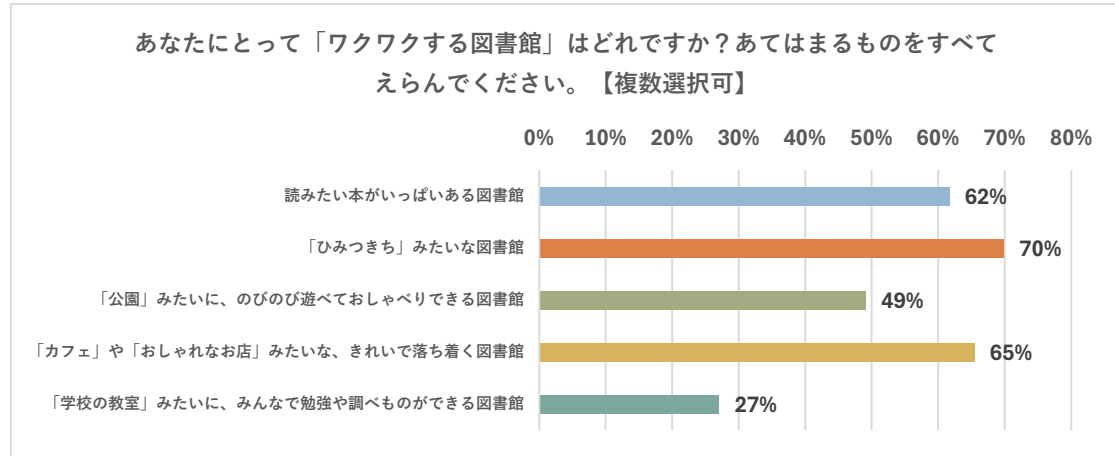
「ね転がったり、クッションにすわってリラックスできる場所」が 77.4%で最多。「カフェがあってジュースやおかしがたべられる場所」(73.6%)、「友だちといっしょに勉強ができる場所」(61.6%)が続き、くつろぎ・飲食・友だちとの活動への関心が高い。

Q08. 新しい図書館で「どんなこと」をしてみたいですか？あてはまるものをすべてえらんでください。【複数選択可】



「実けんや工作をするワークショップ」が 59.1%で最多。「ゲームを友だちと楽しむ」(52.2%) も高く、体験型・交流型のプログラムへの関心が強い。

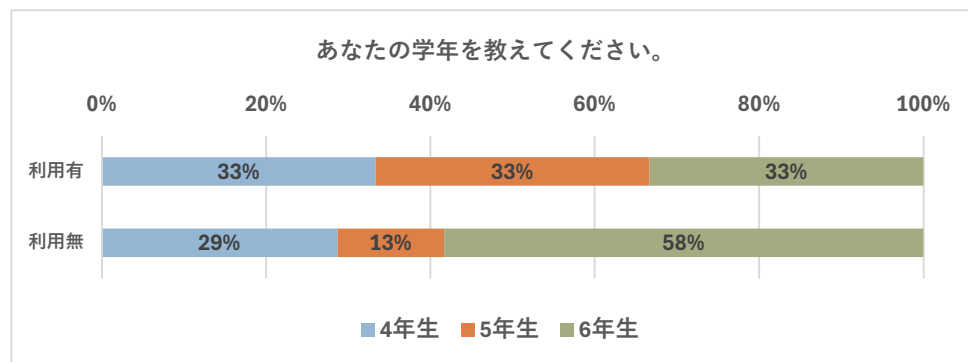
Q09. あなたにとって「ワクワクする図書館」はどれですか？あてはまるものをすべてえらんでください。【複数選択可】



『ひみつきち』みたいな図書館」が 69.8%で最多。『「カフェ」や「おしゃれなお店」みたいな図書館」(65.4%)、「読みたい本がいっぱいある図書館」(61.6%)が続き、非日常感・くつろぎ・蔵書の充実という3方向のイメージが支持されている。

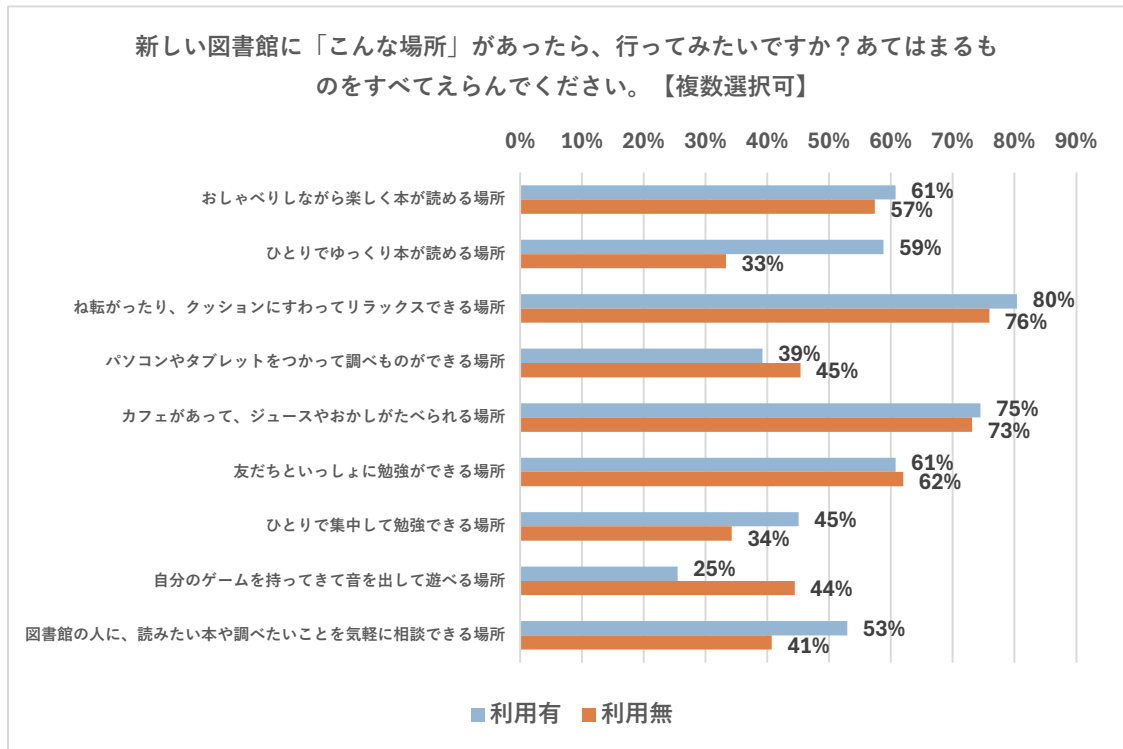
クロス集計 (利用有無)

Q01. あなたの学年を教えてください。



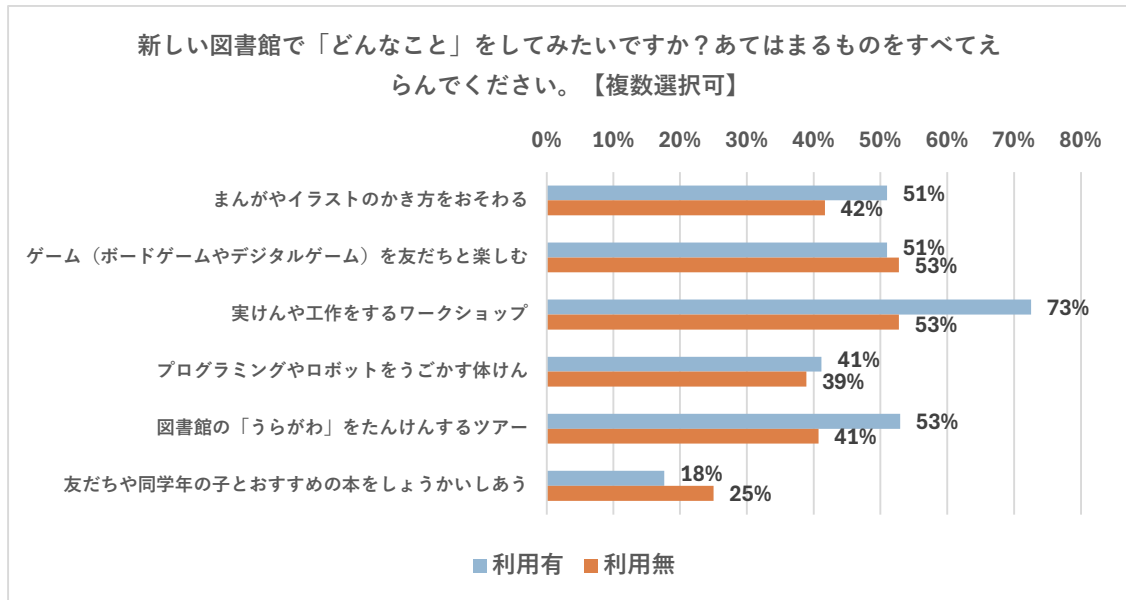
利用有層（月1回以上利用）は4～6年生がほぼ均等であるのに対し、利用無層（年に数回以下）では6年生が58.3%を占める。学年が上がるにつれて図書館から足が離れていく傾向がうかがえる。

Q07. 新しい図書館に「こんな場所」があったら、行ってみたいですか？あてはまるものをすべてえらんでください。【複数選択可】



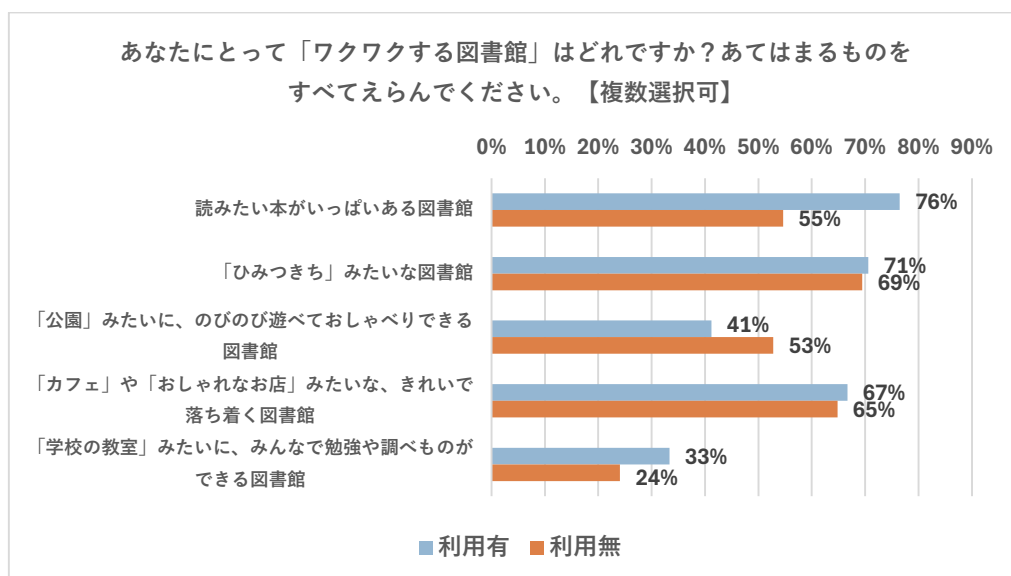
利用有層は「ひとりでゆっくり本が読める場所」を求める割合が高いのに対し、利用無層は「自分のゲームを持ってきて音を出して遊べる場所」を求める割合が高く、両層が新施設に期待する体験の方向性が異なることがわかる。

Q08. 新しい図書館で「どんなこと」をしてみたいですか？あてはまるものをすべてえらんでください。【複数選択可】



利用有層は「実けんや工作をするワークショップ」（有 72.5%／無 52.8%、+19.8pt）への関心が高く、既存利用者ほど体験型プログラムへの参加意欲が強い。

Q09. あなたにとって「ワクワクする図書館」はどれですか？あてはまるものをすべてえらんでください。【複数選択可】

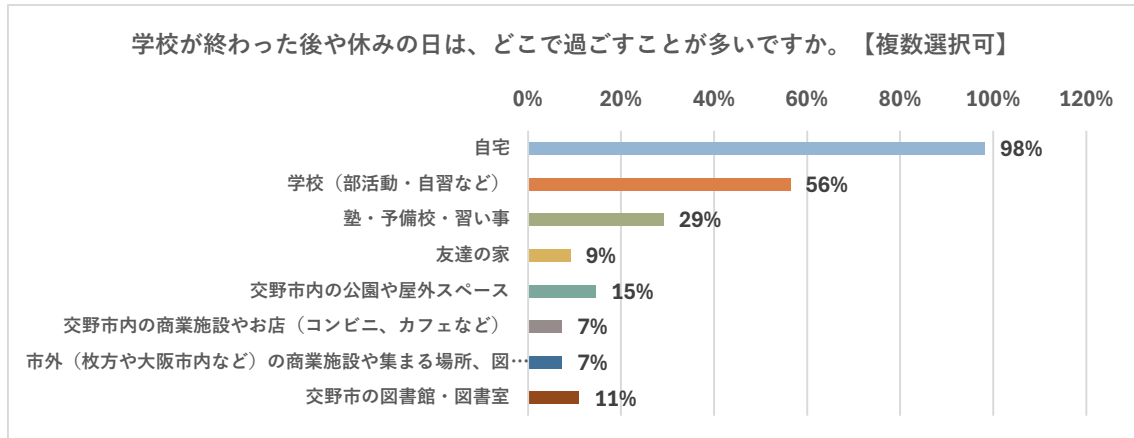


利用有層は「読みたい本がいっぱいある図書館」を求める割合が高いのに対し、利用無層は『公園』みたいにのびのび遊べておしゃべりできる図書館」を求める割合がやや高く、Q7と同様に「本」と「遊び」という異なる方向性の期待が分かれている。

05. 中・高校生向けアンケート

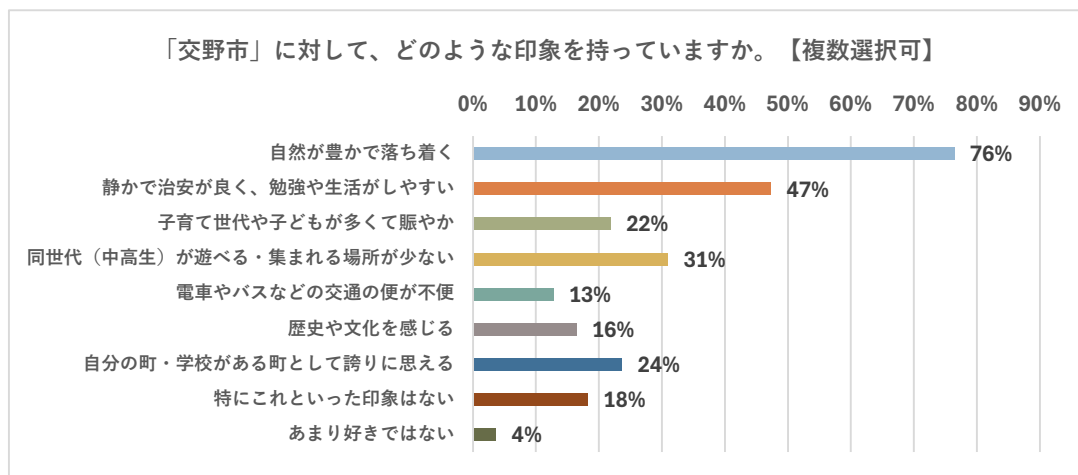
単純集計

Q04. 学校が終わった後や休みの日は、どこで過ごすことが多いですか。【複数選択可】



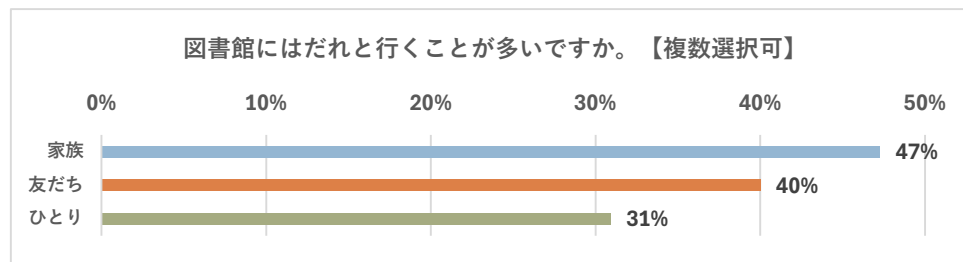
放課後や休日の過ごし場所は「自宅」が98.2%で圧倒的多数。「学校（部活動・自習等）」（56.4%）が続く一方、「交野市の図書館・図書室」はわずか10.9%にとどまる。

Q05. 「交野市」に対して、どのような印象を持っていますか。【複数選択可】



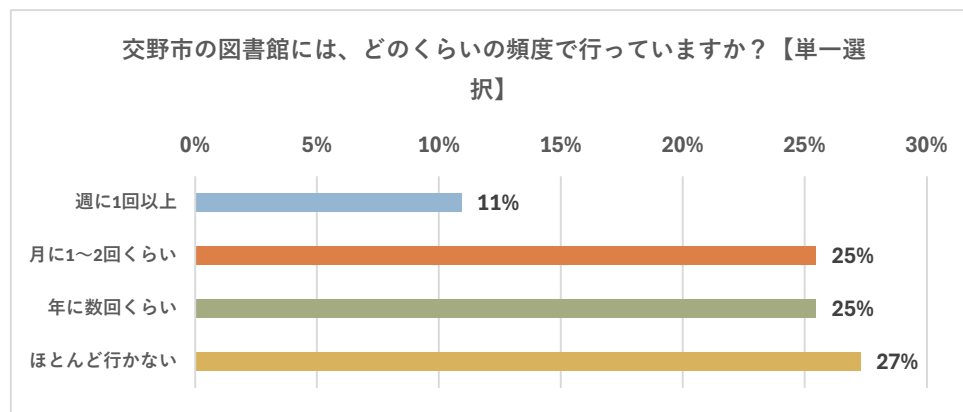
交野市への印象は「自然が豊かで落ち着く」が最多だが、「同世代（中高生）が遊べる・集まれる場所が少ない」も30.9%と3割を超えており、中高生向けの居場所不足が課題として表れている。

Q07. 図書館にはだれと行くことが多いですか。【複数選択可】



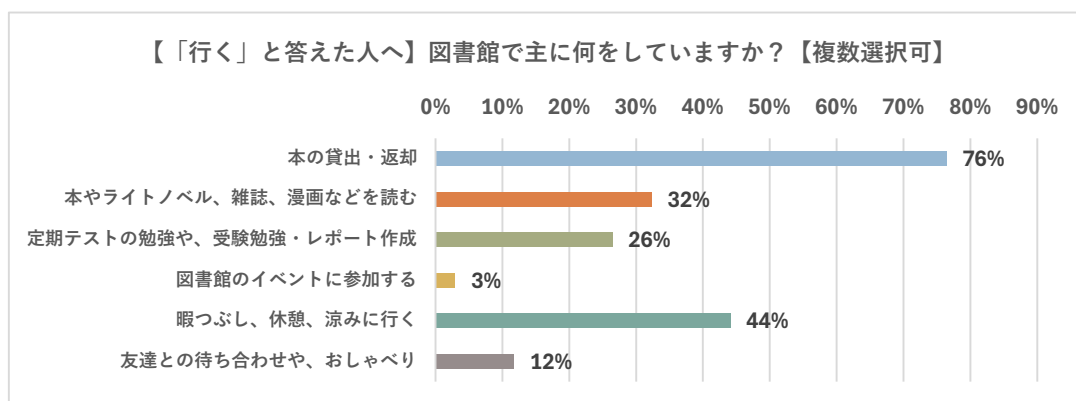
「家族」(47.3%) が最多で、「友だち」(40.0%)、「ひとり」(30.9%) が続く。小学生に比べ、友だち・ひとりでの来館の割合が高まる。

Q08. 交野市の図書館には、どのくらいの頻度で行っていますか？【単一選択】



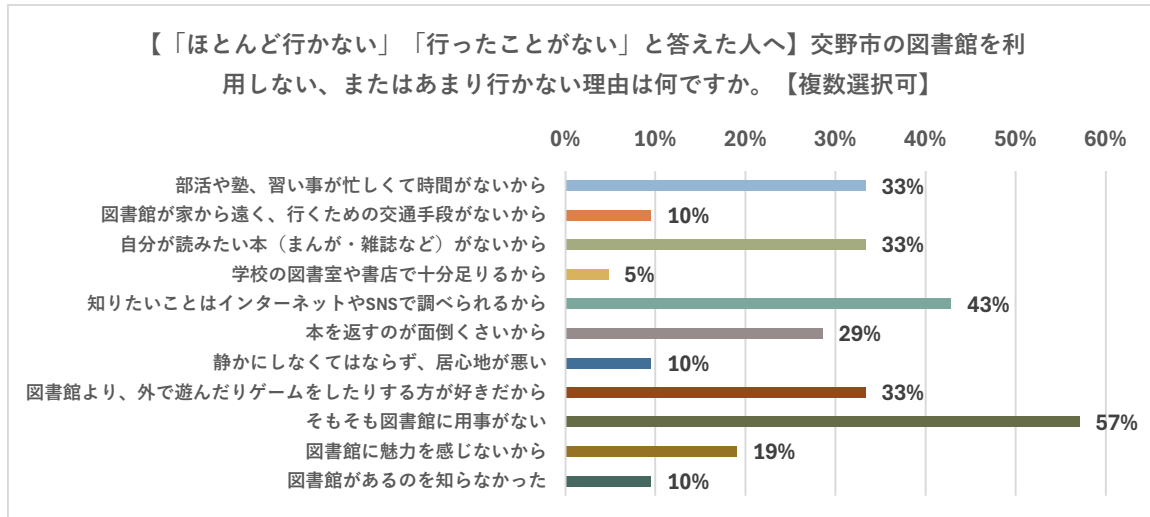
「ほとんど行かない」が 27.3% で最多。「月に 1~2 回」「年に数回」がいずれも 25.5% で僅差に続き、定期的な利用者（週 1 回以上）は 10.9% にとどまる。

Q09. 【「行く」と答えた人へ】図書館で主に何をしていますか？【複数選択可】



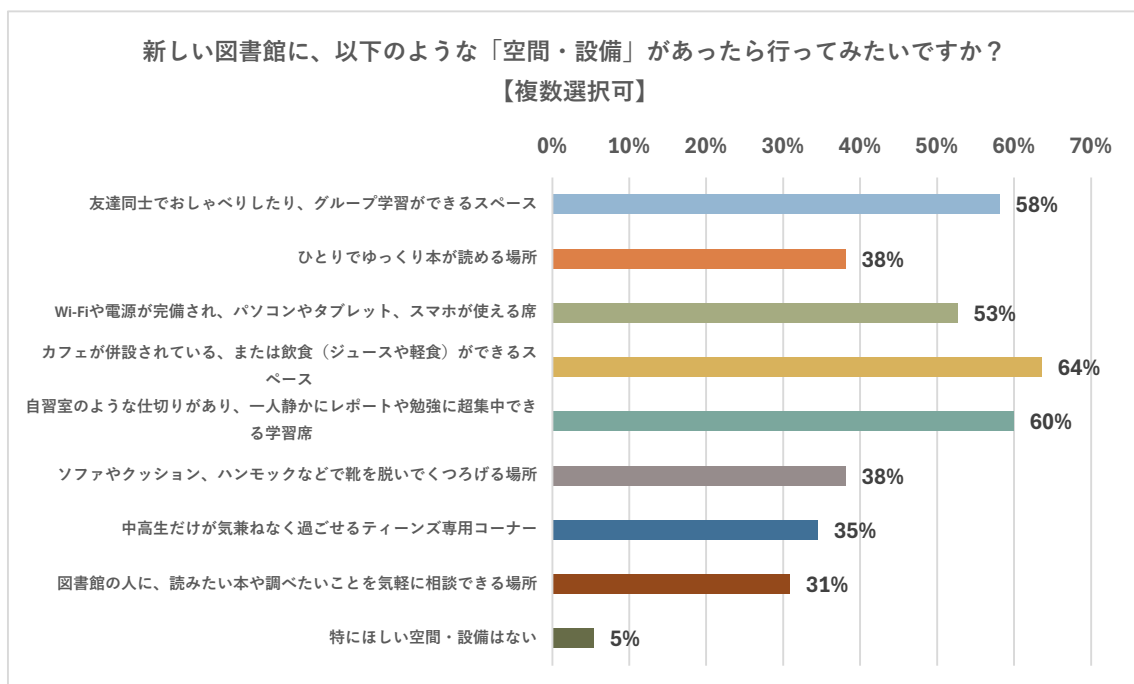
来館する生徒の主な行動は「本の貸出・返却」(76.5%) が最多。「暇つぶし、休憩、涼みに行く」(44.1%) も 4 割を超え、目的的な利用と気軽な利用の両方がみられる。

Q010. 【「ほとんど行かない」「行ったことがない」と答えた人へ】交野市の図書館を利用しない、またはあまり行かない理由は何ですか。【複数選択可】



利用しない理由は「そもそも図書館に用事がない」が57.1%で突出。「知りたいことはインターネットやSNSで調べられるから」(42.9%)が続く。施設面の不満よりも動機の欠如が主因であることがわかる。

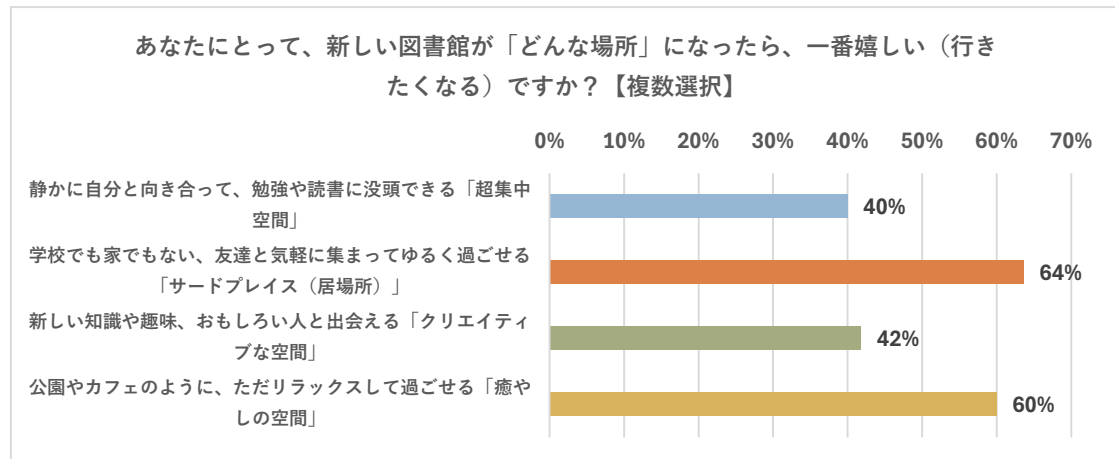
Q011. 新しい図書館に、以下のような「空間・設備」があったら行ってみたいですか？【複数選択可】



欲しい空間・設備は「カフェが併設されている、または飲食ができるスペース」(63.6%)

が最多。「自習室のような一人静かに集中できる学習席」(60.0%)、「友達同士でおしゃべりやグループ学習ができるスペース」(58.2%)が僅差で続き、飲食・個別学習・交流という3つの異なるニーズが並立している。

Q013. あなたにとって、新しい図書館が「どんな場所」になったら、一番嬉しい（行きたくなる）ですか？【複数選択】



新しい図書館に最も期待する姿は「学校でも家でもない、友達と気軽に集まってゆるく過ごせる『サードプレイス（居場所）』」が63.6%で最多。「公園やカフェのような『癒やしの空間』」(60.0%)が続き、勉強のための場所以上に「居場所」としての機能が強く求められている。

(仮称) 青年の家図書館市民参加ワークショップ実施報告書

01. ワークショップの概要

ワークショップは、令和 8 年 8 月 22 日（土曜日）14 時から 16 時まで、青年の家 2 階において開催した。周知にあたっては、市のホームページへの掲載のほか、市内公共施設への案内チラシの掲示を行った。また、子育て家庭でも参加しやすいよう託児室を設け、当日は 25 名の参加があった。

ワークショップでは、参加者を 4 つの班に分け、「人」カードと「時間」カードを組み合わせるワークを行った。「誰が」「いつ」利用するのかという偶然の組み合わせから想像を広げることで、一人では思いつかないような、新しい青年の家で過ごす「素敵な情景」を各班で生み出した。

続いて、思い描いた「素敵な情景」を実際に実現するためにはどのような空間や運営の工夫が必要かについて、班ごとに話し合いを行った。

参加者は楽しみながら想像力を広げ、将来の青年の家の情景について活発な意見交換を行った。

02. ワークショップの結果から読み取れる傾向とまとめ

ワークショップを通じて、現在と将来の交野市における暮らしを見据えた「新しい図書館で実現したい素敵な情景」を描き、その実現方策を検討した。「素敵な情景」に込められた人物像や時間の過ごし方のイメージを手がかりに、実現に必要な空間構成、サービス内容、運営上の工夫など、実現のためのアイデアについて具体的に整理した。

45 件の情景を俯瞰すると、「サードプレイス」「学びの支援」といった一般的な施設機能の分類だけでは捉えきれない、交野ならではの傾向が浮かび上がった。無作為に配られた「誰が」がどのような人物であっても、参加者が思い描く情景の多くは、特別な配慮や仕掛けを声高に主張するのではなく、来館者同士・来館者と運営者との「心理的な距離の近さ」を自然に大切にする方向に向かっていた。この共通する感覚を手がかりに、各情景に書かれた「場所」「運営の工夫」の内容の傾向が自然にまとまる単位を見出し、以下の 6 つの構造として整理した。

【誰にとっても垣根の低い図書館】

市長・商店主・会社員など、参加者はそれぞれの肩書きや立場にとらわれず、誰もが市民として気軽に立ち寄れる情景を思い描いた。教育長がふらりと利用者調査に訪れる情景、商店主が掲示板を眺める情景、休日の夜まで開館するアイデアは、「市長だから」「教育長だから」といった特別な肩書を必要とせず、公的施設に対する敷居を下げたいという参加者の感覚の表れといえる。（仮称）青年の家図書館は、どのような肩書きを持つ人にとっても、利用のハードルが低い場所であることをめざす。

【誰もが、自分らしく過ごせる場所】

手話を使う人にはクリスマスソングを手話で歌う情景、視覚に障害がある人には点字教室の情景、日本語を学ぶ外国人にはフリーハグで交流する情景、移住してきたばかりの人にはお茶を飲みながら出身地の話で盛り上がる情景。参加者はその人物像に向き合い、特別扱いや隔離ではなく、誰もが当たり前の日常として過ごせる場面を思い描いていた。中でもベビーカー利用者の情景には7票が集まり、バリアフリー化への関心の高さがうかがえる。属性の違いを意識させないこうした情景の積み重ねに、交野らしい心理的距離の近さが表れている。

【個の時間を尊重し、ゆるやかにつながる居場所】

参加者はしばしば「誰かと一緒に何かをする」のではなく「誰かがいる場所で、思い思いの時間を過ごす」情景を思い描いた。図書館デートをする大学生、専門書に没頭する起業家、有休をとって本を楽しむパパ、交野の水を使ったコーヒーを味わいながらまちを紹介する情景。会話や交流を強制されない、しかし孤立もしていない、そんなゆるやかな距離感の心地よさが、無作為に配られたどの人物像においても繰り返し立ち現れていた。

【子どもたちが安心して過ごせる第三の居場所】

小中学生や子育て世代の利用を想定した場面では、参加者は家庭でも学校でもない「もうひとつの居場所」として図書館を思い描く傾向が見られた。中でも「小中学生の集合場所」の情景には45件中最多の11票が集まっており、誰かが見守ってくれている安心感と、干渉されすぎない自由さが両立する場所として、図書館への期待が寄せられている。

【市民の個性や活動が地域へ広がる舞台】

商店主、学生、芸術家などによるポップアップ出店やコンサート、作品展示など、個人の特技や関心がまちの新たな魅力や交流を生み出す情景が思い描かれた。特に展示や発表の場としての機能には高いニーズが寄せられており、既に現状の展示がうまく運営されているとの声もあった。表現活動を行う市民とそれを受け止める来館者との間にある距離を、図書館という場が自然に橋渡ししている。

【学校でも家でもない、寄り道でつながる学び】

科学イベント、料理教室、星空観察など、学校教育や家庭学習とは異なる、体験型の気軽な学びの情景が描かれた。講師を招いた科学イベント、季節の料理教室、夜のプラネタリウム。決められたカリキュラムではなく、その日ふらっと立ち寄って参加できる気軽さが、子どもから大人まで幅広い世代の学びへの心理的なハードルを下げている。

03. 「情景」から読み取れる価値観と課題

ワークショップで描かれた「素敵な情景」には、単なる施設機能の要望ではなく、(仮称)青年の家図書館を含む交野市における暮らしの理想像が表れている。6つの構造に共通して流れ

ていたのは、「機能の充実」以上に「関係性の距離感」への期待であった。例えば、次のような意見は、いずれも人と人、あるいは人と図書館との心理的な距離のあり方を示すものである。

ワークショップで描かれた 45 件の「素敵な情景」には、単なる施設機能の要望ではなく、(仮称) 青年の家図書館を含む交野市における暮らしの理想像が表れている。

例えば、

「新聞を読みながら過ごす、目的のない居場所」

「手話や点字を使う人が、特別扱いされることなく過ごせる場」

「小中学生が放課後に自然と集まれる場所」(45 件中最多得票：11 票)

「商店主や芸術家が、自分の得意なことをまちの人に見てもらえる舞台」

「市長や教育長が、一市民として気軽に立ち寄れる図書館」

「ベビーカーを押したまま気兼ねなく入れる場所」(45 件中 2 番目の得票：7 票)

「決められたカリキュラムではなく、ふらっと立ち寄れる学びの場」

といった意見は、いずれも「機能の要望」ではなく「関係性のあり方」への期待を示すものである。

これらを整理すると、以下のような潜在的ニーズが浮かび上がる。

「目的がなくても、ただそこにいられる時間を求めている」

「特別な配慮としてではなく、当たり前の日常として受け入れられたい」

「肩書きに関係なく、気軽に人と関われる場を求めている」

「自分の得意なことや好きなことを、誰かに見つけてもらいたい」

「学校でも家でもない、もう一つの居場所を求めている」

「小さな子ども連れでも、身構えずに利用できる環境を求めている」

04. ワークショップから導かれる本施設の構造

ワークショップでの意見から導かれた(仮称)青年の家図書館の構造を整理する。

①くつろぎ・滞在の場

新聞を読む高齢者、café time を楽しむ主婦、専門書に没頭する起業家、有休をとって本を読むパパ、交野の水を使ったコーヒーを町外の来訪者に紹介する情景など、目的の有無にかかわらず、ゆったりと時間を過ごせる場を求める情景が最も多く挙げられた。バドミントンをして過ごす情景のように、読書以外の過ごし方を求める声も含まれる。

②誰もが利用しやすい環境

手話でクリスマスソングを歌う情景、点字教室、ベビーカーで入店できる情景、車いすでの美術展鑑賞、移住してきたばかりの人がまちを観察しながら会話を楽しむ情景など、障がいや国籍、まちにきたばかりかどうかにかかわらず、誰もが気兼ねなく利用できる環境を求める情景が挙げられた。

③子どもと子育て世代の居場所

小中学生の集合場所、パパが子守りをしながら過ごす情景、雨の日の子ども向けワークショ

ップなど、子どもや子育て世代が安心して過ごせる居場所を求める情景が挙げられた。

④市民の活動発表・にぎわいの場

商店主によるマルシェ、芸術家の発表会・展示会、ナイトコンサート、キッチンカー、正月のかたのかるたなど、市民自身の活動や地域の行事をまちに発信できる舞台を求める情景が挙げられた。

⑤行政・まちとの距離が近い窓口

市長との交流会、教育長の利用者調査、商店主が掲示板を見る情景、休日夜間の特別開館など、行政と市民の距離が近い、身近な窓口としての図書館を求める情景が挙げられた。

⑥多様な学びの機会

夜のプラネタリウム、講師を招いた科学イベント、お料理教室など、学校の授業とは異なる体験型の学びを求める情景が挙げられた。件数は少ないが、決められたカリキュラムに縛られない学びへの関心がうかがえる。